

狐

新美南吉

青空文庫

月夜に七人の子供が歩いておりました。

大きい子供も小さい子供もまじっておりました。

月は、上から照らしておりました。子供たちの影は短かく地べたにうつりました。

子供たちはじぶんじぶんの影を見て、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。

そこで、おかしくなつて、笑い出す子もありました。あまりかっこうがよくないので二、三步はしつて見る子もありました。

こんな月夜には、子供たちは何か夢みたいなことを考えがちで
ありました。

子供たちは小さい村から、半里ばかりはなれた本郷ほんごうへ、夜のお祭を見にゆくところでした。

切通しをのぼると、かそかな春の夜風につて、ひゆうひやりやりやと笛の音が聞ねえて来ました。

子供たちの足はしぜんにはやくなりました。

すると一人の子供がおくれてしまいました。

「文六ぶんろくちゃん、早く来い」

とほかの子供が呼びました。

文六ちゃんは月の光でも、やせつぼちで、色の白い、眼玉の大

きいことのわかる子供です。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

「おれんでも俺、おかつ母ちゃんの下げ駄ただもん」

と、とうとう鼻をなりました。なるほど細長いあしのさきには大きな、おとな大人のおとな下駄がはかれています。

二

本郷にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子供たちはその店にはいつてゆきました。文六ちゃんの下駄をかうのです。文六ちゃんのお母さんに頼まれたのです。

「あののイ、小母さん」

と、義則君よしのりが口をとがらして下駄屋の小母さんにいいました。

「こいつのイ、樽屋たるやの清せいさの子供だけのイ、下駄を一足やつとくれや。あとから、おつ母さんが銭ぜにもつてくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子供がよく見えるように、まえへ押しだしました。それは文六ちゃんでした。文六ちゃんは二つばかり眼まばたきしてつつ立っていました。

小母さんは笑い出して、下駄を柵たなからおろしてくれました。

どの下駄が足によくあうかは、足にあてて見なければわかりません。義則君が、お父さんか何そのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがってくれました。何しろ文六ちゃんは、一人きりの子

供で、甘えん坊でした。

ちようど文六ちゃんが、新しい下駄をはいたときに、腰のまがつたお婆ばあさんが下駄屋さんにはいつて来ました。そしてお婆さんはふとこんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩げに新しい下駄をおろすと狐きつねがつくというだに」

子供たちはびっくりしてお婆さんの顔を見ました。

「嘘うそだい、そんなこと」

とやがて義則君がいました。

「迷信だ」

とほかの一人がいました。

それでも子供たちの顔には何か心配な色がただよっていました。

「ようし、せいじゃ、小母さんがまじないしてやろう」

と、下駄屋の小母さんが口軽くいいました。

小母さんは、マツチを一本するまねして、文六ちゃんの新しい下駄のうらに、ちよつと触さわりました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐も狸たぬきもつきやしん」

そこで子供たちは下駄屋さんを出ました。

三

子供たちは綿菓子わたがしを喰たべながら、稚児ちごさんが二つの扇を、眼に

もとまらぬ速さでまわしながら、舞台の上で舞うのを見ていました。その稚児さんは、お白粉しろいをぬりこくつて顔をいろどつていますが、よく見ると、お多福湯たふくゆのトネ子でありましたので、

「あれ、トネ子だよ、ふふ」

とささやきあつたりしました。

稚児さんを見るのに飽くと、くらいとところにいつて、鼠花ねずみはな火なびをはじかせたり、かんしやく玉を石垣いしがきにぶつかけたりしました。

舞台を照らすあかるい電燈には、虫がいつぱい来て、そのまわりをめぐるていました。見ると、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、あか土色の蛾ががぴつたりはりついていました。

山車だしの鼻先のせまいところで、人形の三番叟さんぼそうが踊りはじめる頃は、すこし、お宮の境内けいだいの人も少すくなくなつたようでした。花火や、ゴム風船の音もへつたようでした。

子供たちは山車の鼻の下にならんで、仰向いて、人形の顔を見
ていました。

人形は大人おとなとも子供ともつかぬ顔をしています。その黒い眼は生きているとしか思えません。ときどき、またたきするのは、人形を踊らす人がうしろで糸をひくのです。子供たちはそんなことはよく知っています。しかし、人形がまたたきすると、子供たちは、何だか、ものがなしいような、ぶきみなような気がします。するととつぜん、パクツと人形が口をあきペロツと舌を出し、

あつというまに、もとのように口をとじてしまいました。まっかな口の中でした。

これも、うしろで糸をひく人がやったことです。子供たちはよく知っているのです。ひるまなら、子供たちは面白がって、ゲラゲラ笑うのです。

けれど子供たちは、いまは笑いませんでした。提ちようちん灯の光の

中で、——影の多い光の中で、まるで生きている人間のように、まばたきしたり、ペロツと舌を出したりする人形……何というぶきみなものでしょう。

——子供たちは思い出しました、文六ちゃんの新しい下駄のことを。晩げに新しい下駄をおろすものは狐につかされるといったあ

の婆さんのことを。

子供たちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里の、野中の道があつたことにも気がつきました。

四

かえりも月夜でありました。

しかし、かえりの月夜は、なんとなくつまらないものです。子供たちは、だまって——ちようど一人一人が、じぶんのこころの中をのぞいてでもいるように、だまって歩いていました。

切通し坂の上に来たとき、一人の子が、もう一人の子の耳に口を寄せて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいつて何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。——こうして、文六ちゃんのほか、子供たちは何か一つのことを、耳から耳へいつたえました。

それはこういうことだったので。「下駄屋さんの小母おばさんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマッチをすつておまじないをしやしんだった。まねごとをしただけだった」

それから子供たちはまたひっそりして歩いてゆきました。ひっそりしているとき子供たちは考えておりました。

——狐につかれるというのはどんなことかしらん。文六ちゃん

の中に狐がいることだろうか。文六ちゃんの姿や形はそのまま
でいて、心は狐になってしまふことだろうか。そうすると、いま
もう、文六ちゃんは狐につかれていますかもしれないわけだ。文六
ちゃんは黙っているからわからないが、心の中はもう狐になって
しまっているかもしれないわけだ。

おなじ月夜で、おなじ野中の道では、誰でもおなじようなこと
を考えるものです。そこでみんなの足はしぜんにはやくなりまし
た。

ぐるりを低い桃の木でとりまかれた池のそばへ、道が来たとき
でした。子供たちの中で誰かが、

「コン」

と小さい咳せきをしました。

ひっそりして歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんでした。

そこで子供たちは、今の咳は誰がしたか、こっそり調べました。すると——文六ちゃんが生かしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのではないかと子供たちは考えました。よく考えて見るとそれは咳ではなかったようでした。狐の鳴声のようでした。

「コン」

とまた文六ちゃんがいきました。

文六ちゃんは狐になってしまったと子供たちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹はいつていると、みんなは恐ろしく思いました。

五

樽屋たるやの文六ちゃんの家は、みんなの家とは少しはなれたところ
にありました。ひろい、蜜柑畑みかんぼたけになっている屋敷にかこわれて、
一軒きり、谷地やちにぽつんと立っていました。子供たちはいつも、
水車のところから少し廻りみちして、文六ちゃんを、その家の門か
口どぐちまで送ってやることにしていました。なぜなら、文六ちゃん

は樽屋の清六さんの一人きりの大事な坊ぼっちゃんで、甘えん坊だからです。文六ちゃんのお母さんが、よく、蜜柑やお菓子をみんなにくれて、文六ちゃんと遊んでやってくれとたのみに来るからです。今晚も、お祭にゆくときには、その門口まで、文六ちゃんを迎えに行つてやったのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところに来ました。水車の横から細い道がわかれて草の中を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんの家に行く道です。

ところが、今夜は誰も、文六ちゃんのことを忘れてしまったかのように、送つてゆこうとするものがありません。忘れたところではありません、文六ちゃんがこわいのです。

甘えん坊の文六ちゃんは、それでも、いつも親切な義則君だけは、こちらへ来てくれるだろうと思つて、うしろをむきむき、水車のかげになつてゆきました。

とうとう、だれも文六ちゃんといつしよにゆきませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとりで、月にあかるい谷地へおりてゆく細道をくだりはじめました。どこかで、蛙かえるがくくみ声で鳴いていました。

文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、もうじきだから、誰も送つてくれなくても、困るわけではないのです。だが、いつもは送つてくれたのです、今夜にかぎっておくつてくれないのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしているようでも、もうちゃんと知っているのです、みんなが、じぶんの下駄のことで何といいかわしたか、また、じぶんが咳せきをしたためにどういうことになったかを。祭にゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてくれたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄をはいて狐にとりつかれたかしのために、もう誰一人かえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなさけないのでした。

義則君なんか文六ちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上に着ている羽織はおりをぬいでかしてくれたものでした（田舎いなかの少年は寒い時、洋服の上に羽織を着ています）。それなのに、今夜は、文六ちゃ

んが、いくら咳をしても羽織を貸してやろうとはいいませんでした。

文六ちゃんの屋敷の外囲いになつてゐる槇まきの生垣いけがきのところに
来ました。背戸口せどぐちの方の小さい木戸をあけて中にはいりながら、
文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師かげぼうしを見てふと、ある心配を
感じました。

——ひよつとすると、じぶんはほんとうに狐につかれてゐるか
もしれない、ということでした。そうすると、お父さんやお母さん
はじぶんをどうするだろうということでした。

お父さんが樽屋さんの組合へいつて、今晚はまだ帰らないので、文六ちゃんとお母さんはさきに寝むやすことになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんといっしょに寝るのです。ひとり子ですからしかたないのです。

「さあ、お祭の話を、母ちゃんにきかしておくれ」

とお母さんは、文六ちゃんのねまきのえりを合わせてやりながらいいました。

文六ちゃんは、学校から帰れば学校のことを、町にゆけば町のことを、映画を見てくれば映画のことをお母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手へたですから、ちぎれちぎれに話をします。

それでもお母さんは、とても面白がつて、よろこんで文六ちゃんの話を書いてくれるのでした。

「みこ神子さんね、あれよく見たら、お多福湯のトネ子だったよ」と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、といつて、面白そうに笑つて、

「それから、もう誰が出たかわからなかつたかい」
とききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼を大きく見ひらいて、じつとしていました。やがて、祭の話はやめて、こんなことをいいだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄おろすと、狐につかれる？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思って、しばらく、あつけにとられて文六ちゃんの顔を見ていましたが、今晚、文六ちゃんの身の上に、おおよそどんなことが起ったか、けんとうがつかまりました。

「誰がそんなことをいった？」

文六ちゃんはむきになって、じぶんのさきの問いをくりかえしました。

「ほんと？」

「嘘だよ、^{うそ}そんなこと。昔の人がそんなことをいっただけだよ」

「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きつとだね」

「きつと」

しばらく文六ちゃんは黙っていました。黙っている間に、大きい眼玉が二度ぐるりぐるりとまわりました。それからいいました。

「もし、ほんとにだつたらどうする？」

「どうするって、何を？」

とお母さんがききかえました。

「もし、僕が、ほんとに狐になつちやつたらどうする？」

お母さんは、しんからおかしいように笑いだしました。

「ね、ね、ね」

と文六ちゃんは、ちよつとてれくさいような顔をして、お母さん

の胸を両手でぐんぐん押しました。

「そうさね」と、お母さんはちよつと考えていてからいいました。

「そしたら、もう、家におくわけにやいかないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

「からすねやま鴉根山の方にゆけば、今でも狐がいるそうだから、そつちへ

ゆくさ」

「母ちゃんや父ちゃんはどうする？」

するとお母さんは、おとな大人が子供をからかうときにするように、

たいへんまじめな顔で、しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあいい文六が、狐にな

ってしまったから、わしたちもこの世に何のたのしみもなくなつてしまったで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、二人で、明日の晩あしたげに下駄屋さんから新しい下駄を買つて来て、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根の方へゆきましよう」

文六ちゃんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根つて、西の方？」

「成岩なるわから西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木がは生えているところだよ」

「猟師はいない？」

「猟師って鉄砲打ちのことかい？ 山の中だからいるかも知れんね」

「猟師が撃ちに来たら、母ちゃんどうしよう？」

「深い洞ほらあな穴の中にはいつて三人で小さくなっていれば見つからないよ」

「でも、雪が降ると餌えさがなくなるでしょう。餌を拾いに出たとき猟師の犬に見つかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょうけんめい走って逃げましょう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんは速いでいいけど、僕は子供の狐だもん、おくれてしまうもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱってあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろに来たら？」

お母さんはちよつと黙っていました。それから、ゆつくりいきました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆつくりいきましょう」
「どうして？」

「犬は母ちゃんに噛かみつくでしょう、そのうちに獵師が来て、母ちゃんをしばってゆくでしょう。その間に、坊やお父ちゃんは逃げてしまうのだよ」

文六ちゃんはびつくりしてお母さんの顔をまじまじと見ました。
「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。せいじゃ、母ちゃんがなし

になつてしまふじやないか」

「でも、そうするよりしようがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆつくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじやないか」

「でもそうするよりしようがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆつくりゆくり……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどつと流れて来ました。

お母さんも、ねまきのそででこっそり眼のふちをふきました、そして文六ちゃんがはねとばした、小さい枕まくらを拾つて、あたまの

下にあてがってやりました。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日発行第1刷

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年6月3日公開

2004年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

狐
新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>